

令和元年市政報告第 4 号（通算第 6 7 号）

館山市 笠名 1 5 0 1

TEL・FAX 2 2 - 4 6 6 1

榎本 祐三 の 市政報告



はじめに

9 月 9 日に襲来した台風 15 号の被害は千葉県全域にわたり、私達の館山市においても多くの家屋が風水被害を受けましたが、皆様のお宅は如何だったでしょうか。被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

私の家も瓦が 40 枚ほど飛び、4 部屋が雨漏りでその対応に大わらわでした。幸い家内がブルーシートを 5 枚ほど準備していましたので、それを各部屋に敷きバスタオルやタオルで水をふき取る作業に一晩中追われました。雨漏りの多かった 2 部屋の天井の板は、雨漏り部分がブヨブヨになってしまいました。

千葉県は、北関東の県のような竜巻や水害の被害も少なく、住みやすい所と話していた矢先のできごとで、「災害は忘れたころにやってくる。」の諺を改めて実感したところでもあります。

今回の台風災害で私たちの生活に影響したのは、家屋の損壊や屋根の雨漏り等、沢山ありますが、私は停電が続いたことによる影響が最も大きかったのではないかと考えています。この件に関しましては後述したいと思います。

このような状況にあっても房日新聞が非常用発電機を稼働させて発刊したことに心から敬意を表したいと思います。通信手段がどうにかつながる携帯電話しかなかったときに、房日新聞の記事は貴重な情報でしたし、記者魂の一端を見せてくれたと思っています。

今回の市政報告は、台風 15 号関連の対応と第 3 中学校の建設問題に関して考えるところをお話ししたいと思います。

台風 15 号関連の対応

この問題に関しましては、全体的なものとして館山市並びに館山市議会の対応等に区別して申し上げたいと思います。

被害を多くした東京電力の初動対応

先にも申し上げておりましたが、私は今回の被災の対応で最も反省しなければならないのは東京電力の最初の発信とっております。

当初東京電力は、停電の復旧は一両日中にできる見通しを発表しました。しかし時間が経過するたびに復旧見込みを修正し、最終的に全ての復旧には 2 週間以上の期間を要したことは、被災県民の期待を裏切ったものであり、猛省を促したいと思うのです。

私の家は 6 日後に電気が復旧しましたが、この間の不便さは想像以上のものでした。つ

まり、電気は今日の文明社会においては必要不可欠なものであり、家庭の不便さは勿論ですが、停電によるこの地方の企業の損失は計り知れないものがあつたと思っております。

東京電力の最初の発信「停電の復旧は一両日中にできる見通し。」によって、アワビや伊勢エビを生かして保存していた千倉の漁業組合では、生きたまま東京方面の市場に出荷することなく、電気の回復を期待しておりましたが、結局停電は回復することなくアワビや伊勢エビは死滅し腐らしてしまいました。この被害は甚大なものがあつたと思います。

東京電力が復旧の見通しを安易な発表とせず、見通しが立っていないことを発表していたなら、事態は大きく変わっていたであろうと思うと残念でたまりません。

かつて私は、海上自衛隊で飛行隊長や航空隊司令として勤務させていただきましたが、そこで経験したことが「災害の最悪の想定と初動全力」の必要性でした。つまり、突発的な事態に対処するためには「最悪の事態を想定して、初動を全力で取り組む」ことが、事態を解決する上で極めて重要なことであるということです。

初動全力で取り組んだ結果、必要がなかったものは徐々に解除すればよいのですが、途中から必要性を認めて対応しようとしても、それは後手に回ることになります。人間万能ではありませんので、臨機応変の対応は容易なことではありません。指揮官として今回のような突発的な事態に対処するためには、最悪を想定した初動全力が不可欠と思っております。

テレビの報道番組では、今回の災害に対する千葉県や市町村の対応を批評するものが増えておりますが、主たる指摘は初動対応「災害対策本部の設置」の遅れであるように思います。

マスコミのコメンテーターの結果を基にした議論を聞くと、「危機に直面していない蚊帳の外の間人が何を言うか。」と言いたいところですが、今回の台風 15 号の被災対応は、多くの反省・教訓があり、今後を生かして行かなければならないと思っております。

館山市と市議会の対応

台風の通過後、館山市は直ちに災害対策本部を設置しました。その中で危機管理室長と地域防災マネージャーの 2 名の海上自衛隊出身の職員が、眼を見張る活躍をしていたことに海上自衛隊出身の先輩として、とても頼もしく思えました。

館山市は、災害対策会議を午前 7 時半と午後 4 時の 2 回実施して情報収集、対応を協議して実行に移していましたが、当初は停電のため固定電話が使用できず、通信手段が携帯電話のみと言う状況の中での情報収集は困難を極めました。

そのような中で、市議会も 11 日から全議員が参加する災害対策会議を設置し、各議員が収集した情報や要望を議会としてとりまとめ、議長と事務局長が本部の対策会議において情報提供する等、対策本部と一体となった取り組みを実施しました。

18 名の議員が個々に情報や地元の要望を本部に伝えることになると混乱をきたすことから、議会としてまとめ精査した上で議長が情報提供等を行うことにしたものです。

情報が極めて限られていた中で、各議員が自分たちの目を見た地元の状況を報告することで、対策本部に的確な情報が伝わったことに対して、本部長である市長からも感謝の言葉をいただきました。

今回の経験は、震災に対する市議会の対応の在り方を勉強する良い機会であつたと思っております。今後今回の経験を生かして館山市議会としてのマニュアルの制定に取り組む

ことが必要であると考えております。

防災組織と地域（町内会）の活動等

今回の震災で各地区に組織されている防災組織がどれだけ機能したのか、検証してみる必要があると思っています。被害の大きい一部の地域においては、区長又は町内会長を中心に活動した地域もあったようですが、区長以下一部役員の疲労は、想像以上のものがあつたと聞いております。

一方で民生委員の皆さんの献身的な活躍も目のあたりにして、心から敬意を表しますとともに感謝を申し上げます。このような時であるからこそ、市民の皆様は役員の皆様の尽力に期待し、感謝していると思います。

通信手段がほとんどなく、本部との連絡調整もままならなかったことを考えると、区長、町内会長と本部の間の通信手段の確保が必要ですので、毎年の防災訓練では、防災無線や防災ラジオの機能点検を実施して確認しておくことも必要と考えています。

また、消防団が団長の適切な指揮統率のもと、被災家屋の調査を数日で実施し、被災実態の把握に多大に貢献していたことにも敬意を表したいと思ひますし、建設協会の皆さんをはじめとする多くのボランティアの皆さんの献身的なご支援がある中で、人の弱みに付け込んだ詐欺が発生していることは誠に残念でたまりません。日本人はそのような民族ではないはずですが、オレオレ詐欺の現実からするとそのようなこともあるのかと空しく思っています。

完全な復旧には年単位の期間が必要と思われませんが、くじけることなく復興に向けて前向きに取り組んで行きたいと思ひておりますので、皆様の力強いご支援・ご協力をお願いする次第です。

第3 中学校の建設問題

第3 中学校の耐震不足が明らかになってから5年以上が経過していますが、この間私達の会派の森議員をはじめ多くの議員が一般質問で市の対応を質しています。そこで何が問題になっているのか、私なりに考えているところをお話ししたいと思います。

市の方針明示の遅れ

館山市は第3 中学校の耐震不足を認識してから、建て替えるための資金調達（有利な財源確保）に取り組んできました。つまり文科省の支援だけでは市の負担は大きく、有利な防衛省の基地対策の財源を得ようと取り組んできたところでした。

この財源確保に集中したことによるのか、校舎の建設場所や建設中の3 中学生の移転先については検討の項目、内容も明らかにされず、明確な方針は示されないままでした。

本年6月になって、急きょ建設場所と統合方針が新聞報道されたことにより、3 中のPTAをはじめとする関係者から大きな疑問を投げかけられたのです。

そもそも、3 中の耐震不足が判明した時点でPTAをはじめとする学校関係者に状況と、今後どのような検討をして行くのか、そして何時ころまでに結論を出すのか等、検討の手順、方針等を明確にして途中経過を報告しておれば、抵抗はあつたとしても納得してもらえたのではないかと思います。

このような市の対応によって、市民が館山市の教育行政そのものに対する不信感を持つ

ことになってしまったことはとても残念に思います。市民協働条例はできましたが、このような執行部の対応では条例そのものが絵に描いた餅になってしまいます。

問題と対策

私は、個人的には執行部が6月に示した方針内容に反対するものではありません。今日置かれた状況からすると、代替えの建設場所がないかぎり新校舎を現在の3中の場所に建てることに矛盾はありません。

また、建設期間中の3中学生を2中に移動させることも、他の方法（旧南高校舎、旧水産高校舎の活用）ができない限り妥当と思いますし、仮校舎（プレハブ）を建てることは建設場所もなく、財政的（約5億円）にも採用できるものではありません。

つまり、これらのことについては経過報告をしなかったことは非難されても仕方ありませんが、執行部としては検討しており、その結果が妥当性の高いものとは思えません。

しかしながら最も大きな問題は、3中学生を2中に移動させる場合、2中校舎及びその施設で2中、3中の二つの別々の学校が運営できるかということです。

誰が考えても、野外運動場や体育館そしてプールも一つしかない状況で、二つの学校が別々にカリキュラムを進めることは無理だと認識できると思います。また、感受性の強い時期の生徒たちが、同じ校舎で別々の学校の生徒として活動することの危険性も見逃してはならないと思います。

そうであるならば、3中の生徒が2中に移動する際には、統合を前提で移動する以外に選択肢はないと思うのです。私も会派の議員と視察しましたが、この度の台風15号で3中校舎屋上の防水シートが剥がれたため大量の雨水が入り、校舎の天井は一部分欠落し、教室の床も一部剥がれており、教育環境としてこれで良いのかと思える状況です。

直ちに移動することは困難ですが、台風による新たな問題も生じたことから、3中学生の2中への移転と統合を来年4月にすべきであると思っています。そのための説明と準備が優先順位をつけて実施されなければならないと思っています。

おわりに

この度の台風15号の被災は、災害の少ないこの地方の私達にとっては想像を絶するものでしたが、津波によって家族や家屋を失った東日本大震災の被害に比べると、まだまだ被害が少なかったのではないかと考えております。

東日本大震災から復興に立ち向かって力強い取り組みをしている皆様を手本として、私達も復興に向けて行政・市民が一丸となって取り組む必要があります。

この度の被災では、自衛隊をはじめ公的機関の職員やボランティアの皆様の献身的な支援があり、また全国の多くの皆様から館山市に対する義援金をいただき心から感謝しているところです。

かつて（昭和55年）私は、海上自衛隊小月基地（下関市）で第32期航空学生の主任指導官として勤務し、海上自衛隊のパイロットになる後輩たちの教育に1年間携わりました。この度昨年海上自衛隊を定年退官した彼らから、被災した館山市のために役立ててほしいと15万円の送金があり、市役所の担当課を通じてふるさと納税したところです。

後輩たちの心遣いには本当に頭の下がる思いですが、館山航空基地が所在する館山市に対する彼らの思いを、少しでもご認識いただければと思っています。